

## Kit Brandon 研究

播磨谷 一 雄

### A Study of Kit Brandon

Ichio HARIMAYA

(1996年11月29日受理)

*Kit Brandon* is the last novel by Sherwood Anderson, and it is based on the experience and observation in Virginia where he lived.

*Kit Brandon* has three aspects to be examined. Firstly it is an educational novel describing the spiritual growth of Kit Brandon. We have to investigate how Kit, a girl of a poor white, finally came to realize the aim of her life, giving up her desires for money and things.

Secondly the vision of womanhood embodied in Kit should be noticed, because Kit embodies a masculinized woman, who has better technique in driving than men and doesn't want to bear a baby. The vision of womanhood stated in *Perhaps Women* seems to have developed into this particular one.

Thirdly we should be careful about the description of social situation and people under the prohibition law. The author intends to criticize the law by describing political corruption, unfairness and violence in the society, and sympathizes with the people distressed by the law. The historical events in the Civil War which took place especially in Virginia are told as the background of characters. The relationship between people and the Civil War is what the author really wants to tell, but those episodes make this novel diffuse.

By analyzing those three aspects it can be concluded that this novel could not surpass the former novels, though it was written with great enthusiasm.

#### 1

*Kit Brandon* は Sherwood Anderson の最後の小説であり、彼が実際に実在の人物の裁判を傍聴したことからヒントを得て書かれたと言われている。この作品には彼の晩年における生活環境の変化やその当時彼が真剣に考えていた思い、長年書きたかったテーマが込められている。彼は1925年に Virginia 州の Troutdale に農場 (Ripshin farm) を買いそこに家を建て、1927年にはその地区の週刊紙の出版社二社を買って編集・発行を始めた。その経営は弟や息子たちが行うことになるが、彼が南部 Virginia 州の地域社会の一員となり、poor white と呼ばれる人々の実態に触れ、彼らとの接触を通してその人間性を直接に感じ取ることができたことは彼の晩年の文学に大きな影響を及ぼしたことは確かである。そのことが後期の短編小説に生かされ、またこ

の小説の主人公 Kit Brandon の家庭環境や時代背景となる南部社会の描写に反映されている。その後1930年に彼は最後の妻となる Eleanor Copenhaver に会い彼女からも多大な影響を受けた。その当時の社会情勢は経済不況で労働運動が盛んであり、彼女は熱心な組合運動の支持者であった。彼は彼女とともに工場や労働闘争の場を視察してまわり、工場労働者の実態を知り彼らを支援する立場をとっている。これらの視察に基づいて1931年には *Perhaps Women* を発表し、機械工業主義社会における女性の強さについて述べ、機械文明の下で無力化した男性ではなく女性に期待できるとしている。そのような女性優位の思想が Kit Brandon の女性像の中に反映されている。

1936年に発表された *Kit Brandon* は女主人公の名前であり、この小説の題名でもある。Anderson が小説の題名として主人公の名前を直接使うことはあ

まりなく、*Sister Carrie* や *Jennie Gerhardt* など主人公の名前をそのまま題名にした Dreiser の作品を意識したと考えられる。この作品の最初の部分で、Kit は工場労働者となって登場し図書館で *Sister Carrie* を借り出す場面がある。Anderson は Virginia 州の山岳地方の出身の名もない少女に、Dreiser の *Sister Carrie* の主人公、Caroline Meeber のような地位を与えて作品の中で活躍させてみたいという意図を持っていたように思われる。従って副題に *A Portrait* とあるように、この作品の中心人物は Kit Brandon であり、彼女の人物像の形成即ち彼女がどのような成長過程を経て最終的な意識に到達したかという Kit 像の形成について考察することが重要である。その意味ではこの作品は教養小説の種類に属すると考えられ、これが大きなテーマの一つである。それと同様に作者の関心は20世紀初頭から中葉に至る時代背景に向けられ、彼女を取り巻く社会情勢や人物たちを描きたいという作者の意図が強く感じられ、この点についても注意が必要である。

Kit の周囲の人物たちは彼女の仕事の変化とともに変わるが、紡績工場の工具や安物雑貨店の店員などの労働者階級の若者たちである。彼らを通して当時の一般の若者たちの思想や行動が示される。また彼女が酒類密造団の首領の息子と結婚してからは、禁酒法の時代にその一団を形成している人物たちの描写があり、彼らの家族的な背景や南北戦争や南部の歴史が熱心に語られる場合がある。これらの点を考察するとこの作品は単に Kit を中心にした教養小説ではなく、南部社会と禁酒法という大きな枠組の中での人々を描写することも大きな目的であったように思われる。小論ではまず Kit Brandon という人間像の形成の過程に注意し、女性像としての Kit の特殊性に着目する。次にここで述べられている南部社会と禁酒法との関係を考察し、この作品の意義を結論づけたい。

## 2

最初に Kit Brandon が置かれている社会環境と、それに伴って彼女がたどる精神的な成長の過程を検討することによって、Kit という人間像がどのように形成されているかを考察していきたい。20世紀初頭の数十年におけるアメリカ南部には綿紡績産業が安価な労働力を求めて進出し、農業で十分な生産を上げられない山岳地方の貧乏白人を多数雇用した。

特に女性の労働者が多く、年長の子供たちでさえ労働力として考えられていた。工場街の近くには工具の住宅があり、狭い部屋に多数詰め込まれる場合も稀ではなかったようである。それが Kit が最初に置かれた環境であった。

Kit の父は農業では暮らせず馬商人であり、定期的な職業を持たない貧乏白人といえる。彼らは決まった仕事がないために、酒類密造の仕事に対して倫理的な抵抗がなく自然に行くことができた。このような貧しい家庭に育った Kit は服や靴などの身につけるものには特に敏感である。作者は Kit の物質に対する欲望の芽がこの時代からあることを暗示している。作者は Kit に彼女の家庭について語らせながら、当時の南部社会で見られた階級差についても言及している。友達の Sarah が Kit と大邸宅の前を通りながら生まれつきの不公平さを嘆く場合がある。<sup>1</sup> また居住地域の相違による階級差も指摘する。工場労働者は工場の近くの住宅に住み、一般の町の人とは区別されていた。高台の道路沿いの土地には工場主やその株主、弁護士や医者などの上流階級の人たちが生垣に囲まれた大邸宅に住んでいた。Kit を含む4人の仲間の一人は、その大邸宅の一つで行われているダンスパーティーの会場の窓に煉瓦を投げ込み逃げるのである。Kit たちにとってはこのような世界は手の届かない夢の世界であり、その行為は嫉妬を含んだ反感を示すと同時に彼らの富に対する憧れを表している。

Kit が交際する仲間として Frank, Agnes, Sarah がおりそれぞれがその時代の労働者階級の若者の生き方を表している。Frank は Kit の友達であり優れた思想の持ち主で、Kit の最初の思想上の指導者の役割を果たしているが、身体が虚弱で健康を害し若死する。Agnes は組合運動の闘士でありストライキの指導者である。一方、Sarah は若さを武器に金持ちの男たちの間を渡り歩き金を稼ぐ大胆な娘である。Agnes が主張する点は、工場では労働者は機械の一部として考えられているが、一個の人格を持った人間として扱われるべきであるということである。また上流階級と労働者階級の貧富の差のない社会の実現を理想としている。作者は Agnes の主張の中に、当時の労働運動の指導者の思想を包含させて紹介しているように思われる。Kit はこの Agnes の考えに対して、“…You’ve your dream. I’ve got another.”<sup>2</sup> と言い労働運動への無関心さを表明しているが、一個の人格を持った人間の尊厳は Agnes により教えられたものであった。

KitはAgnesよりはSarahに大きく影響される。Sarahは女工としてのほぼ定められた将来の生活(結婚・出産・労働)とは別の生き方即ち金に不自由しない贅沢な生活をしたいと考えている。その目的のためには彼女の若さと美しさを奔放に使う何の罪悪感も感じない。彼女の人生観の根底にあるのは富や物質への憧れである。このようなSarahの生き方に対して、Kitは雑貨店の店員としての現在の生活から逃れることのできる自由な開放感を感じ、冒険心を刺激されAgnesよりもSarahのように生きようと決心する。

Kitの物質的な豊かさへの憧れはSarahと同様に強い。ホテルでの快適な生活、美しい服装、高性能の車などに対する物質的な欲望は倫理観や人間としての個人の価値を超えるほど大きいのである。彼女が酒類密造団の首領の息子Gordonとの結婚を決心するのは、愛情の有無ではなくて物質的な欲望を満たすことが可能であったからである。

There was the temptation. It was evident there would be plenty of money, what seemed to her fairly oceans of money.<sup>3</sup>

“Do you not love me, Kit?”

“Well, I don’t know. I can’t tell you yet.”

There was one thing certain. She loved his car.<sup>4</sup>

このように南部の貧乏白人の娘であるKitは最初は豊かさへの憧れから物欲にとらわれ物質文明に毒される人間として描かれている。彼女は当分の間は一見豊かで華やかな生活を享受するよう見えるが、精神的には空虚なままである。Gordonとの結婚生活が満足すべきものではなく、彼の家族とも意志の疎通を欠いているからである。密造酒団の中でも、有能な運転手ではあるが孤立していて常に孤独感に悩むのである。ここに作者の物質主義に対する批判的な態度や現代社会における孤独の問題への関心を読みとることができる。Kitは生活の空虚さを忘れるために危険を伴う密造酒輸送の仕事に集中し、一時的に真実の生活を生きているように感ずる。この段階では彼女には罪悪感はなく、空虚な生活を打破するための冒険心のみで行動しているのである。しかし密造団に内部抗争が発生し殺人事件に発展した時、彼女は初めて密造団を悪として認識する。

警官に追われたKitはJoel Hanafordに助けられる。彼は戦争での怪我による障害者である。彼女は彼が孤独の壁を破ってくれると期待するが、障害

のために彼らは愛を成就することができない。HanafordはKitの最終的な指導者の役割を果たす。彼は障害者であるにもかかわらず毅然とした態度をとり、彼女に人間としての尊厳を教える。彼により彼女は密造団の運搬者としての冒険や物質主義の無意味さを自覚するのである。彼女が強く必要と感ずるのは人との交わりである。彼女は逃走中に農業を営む若い夫婦が住む近くに身をひそめ彼らの生活を見守る場面がある。彼女と同じ位の年齢の若い夫婦がそれぞれの役割を果たして確実に生活している姿を見て、“What did I want? What have I always wanted?”<sup>5</sup>と自問する。彼女は将来の生き方の方向が示されたように感ずる。彼女は物質主義を捨て精神的な充実を求め、孤独の壁を打ち破る人間関係を築くことを目標にすることを決意する。

She would get into some sort of work that did not so separated from others. There might be some one other puzzled and baffled young one with whom she could make a real partnership in living.<sup>6</sup>

## 3

2においてKitの置かれた環境をたどり、その環境や周囲の人物にいかん影響され精神的な成長をとげてきたかを検討してきた。注意すべきことはこの一連の過程はこれまでのいくつかの作品で見られた主人公の場合と同じ図式であり、この作品では主人公が女性であるという点だけが相違点である。そのためにKitという女性像は、これまでの場合と比較して特殊なものになっているかどうかに着目しながら、以前の作品に見られた女性像と比較し検討を加えたい。

初期の作品に見られる女性像は教師としての即ち教える女としての女性像である。Winesburg, Ohioの*The Teacher*におけるKate SwiftとGeorge Willardや*Windy McPherson’s Son*におけるSamとMary Underwood, *Poor White*におけるHugh McVeyとSarah Shepardの関係にそれを見ることができる。彼女らはいずれも初期の段階で貧しい家庭環境にある主人公の天分を見つけたし、彼らにしつけや規律を教え込み激励する役割を果たす。主人公が結婚すると、その精神的支柱の役割は彼らの妻が果たすことになる。SamとSusan Rainy, Hugh McVeyとClara Butterworthの関係においてそれ

が顕著に見られる。Samは放浪の末、引き取った3人の息子とともに帰還しSusanに強い母性を期待する。ClaraはHughを発明者としてではなく子供として考え母性的な愛を与える。SamやHughはいずれも機械主義文明に疲労し疎外感を感じている男たちである。SusanやClaraは受動的に描かれ主人公を先導する積極性には乏しいものの、彼らの精神的な苦悩を回復させる豊かな母性を持つ女性として描かれている。これまでの女性像は男性に知識や母性を与える存在であったと言える。

次に*Dark Laughter*におけるFredとAlineの場合を考察すると、与える女性から自己の意志により行動する女性に変化しているように思われる。Fredは会社の経営に熱中し妻に気を使う余裕がなく、妻の不満を解消することができない。Alineは夫への愛情を捨てきれずにいるが、思い悩みながらも最終的には明確な意志を持ち行動する。彼女が最後に庭師Bruceと行動を共にし夫と別れる場面で、彼女の強い意志が次のように表明されている。

To go living with Fred would be a lie. Not to go with her lover would be a lie.<sup>7</sup>

AlineとBruceが去った後Fredは次のように回想する。

Aline had been like a mother to him. When he was discouraged or upset she was someone to talk to. Lately she had been more and more like a mother. Could a mother so desert a child?<sup>8</sup>

Fredが期待しているのは彼を無条件で受け入れ彼の苦悩を癒してくれる強い母性である。しかしAlineはSusanやClaraのように一方的に母性を与え続ける役割を捨て、自己の信ずる道を選択しBruceとの新生活に踏み出す勇気を持つのである。

*Dark Laughter*を境にして、Andersonの描く女性像は、次第にKitの表す夫に頼らず自立心に富み子供を生まない、いわば男性的なものに接近していったように思われる。1932年に出版された*Beyond Desire*においては、女主人公Ethel Longは真に情熱を感じず若者Red Oliverより45歳の中年の弁護士を選択する。またBlancheは32歳であるがEthelの年老いた父と結婚し、経済的に安定した生活を選ぶ。彼女らはともに夫に期待するのは金銭的な豊かさであり、それと引き替えに愛情を捨て、孤独感に悩み精神的な不満を持つ女性たちである。彼らは母

性を捨てた女性といえる。

Andersonは1931年に出版された*Perhaps Women*において、男性はその指導的な立場を女性に譲るべきであるという論を展開した。<sup>9</sup>それによれば現代の機械工業社会において、男性は機械が彼らの代わりに仕事をするようになったためにその力を失ったというのである。女性がなぜ機械に影響されることが少ないかについては次のように述べている。

It may, if she becomes a machine operator, tire her physically but it cannot paralyze or make impotent her spirit. She remains, as she will remain, a being with a hidden inner life. The machine can never bring children into the world.<sup>10</sup>

Andersonは女性の出産能力を重視し、機械は女性の母となる能力を損なうことはできないと考えた。この思想は女性を神秘化し過ぎているという点で問題があるとしても、彼は男性が困難な状況にありそれを救うのは女性だと考えていたのである。このように1931-32年の時期においては、彼には母性を備え男性を救済できる女性と、母性を失いその代わりに自立心を持ち男性に替わる力を持つ女性という二種類の女性像が存在していたように思われる。

次にこの点から1936年に出版された*Kit Brandon*の場合を考察していきたい。KitにとってGordonは夫でありながら最初から無視される存在である。Kitは完全にGordonを支配し、前述のEthelやBlancheの場合と同様に、愛情はないが経済的な豊かさを求めて結婚し夫には関心がない女性の中に含まれる。注意すべきはKitは夫の父Tomに孫を生むように要請されるが、それに答える積もりは全くなく、彼女もまた子供を生まない母性を捨てた女であるということである。逆に彼女は優れた運転技術を生かした密造酒運搬車を先導する運転手の仕事を選ぶのである。これは男性と同等以上の能力を与えられていることであり、これまでの作品の女性像と全く違う面であると言える。作者はKitを一連の変化する女性像の中に位置づけながら、さらに男性的な能力を賦与し彼女に男性化したイメージを与えているように思われる。

彼女に男性と同じような力を与えたのは、高性能の自動車という現代の機械力であり彼女本来の力ではない。Andersonは*Perhaps Woman*において自動車について次のように述べている。

…the ownership of any sort of an automobile will give him all he is asking, this fake feeling of power.<sup>11</sup>

即ち人は自動車の与える力を手に入れても、それは金で買った代替的な力であり真の精神的な力に裏打ちされていないので、すぐに失われる偽りの力であるというのである。Kitは密造酒製造団の男たちの荒々しい暴力の世界に巻き込まれ、真の家族も友達もない孤立した存在である。彼女は一団の中であって活動する時も休む時も常に車の中やホテルの部屋の中において、いわば孤独の壁に取り囲まれているのである。彼女は母性を失う代わりに男性と同じ能力を得たが、男性と同じように孤独感や疎外感に悩まされ、機械文明に毒されない真の精神的な力を持たないのである。

Andersonの描いている女性像を初期からKitに至るまで考察してきたが、*Perhaps Women*以降に大きな変化が見られた。Kitの表す女性像は男性と同等の働きをし自立した女性という点で、実際のモデルを生かした特色のある女性像だったといえる。しかし作り上げられた女性像は、初期の作品の男性主人公と同様に孤独感や疎外感に苦悩するものであった。最終的にはKitもまた彼らと同じように、人間の連帯の必要性を認識し、将来、人との交わりができた社会にとって有意義な仕事をすることを決意し物語が終わるのである。この結論はAndersonの最初の作品、*Windy McPherson's Son*の主人公、Samのたどり着いた最終的な目標と大差なく、Andersonはこの点においては初期から何の進展も見られなかったといえる。

## 4

次にKitを取り囲む社会的背景について検討したい。大きな社会的な背景としては、まずVirginia州という南部社会があるが、異常な社会状況が生じているのは禁酒法のためであり、禁酒法がこの物語を支配する重要な要素となっている。Kitが活躍するのは違法業者の一団においてであり、その異常な社会状況に身を置いている。作者の意図はKitについて述べるばかりでなく、南部社会における禁酒法下の社会状況や人々を描写し、作者自身の意見を反映させることにもあったように思われる。

作者の関心はVirginia州の山岳地方に住む人々に向けられ、彼らの状況について非常に同情的に描

写している。酒の密造は、肥沃な土地がなく貧しい生活をしている彼らにとって重要な収入源であると述べている。特に禁酒法下の社会では密造酒の需要がますます高まる傾向にあった。

It was no wonder that the money crop of the hills, moonliquor, had, under prohibition, got so important.<sup>12</sup>

豊かな金持は他のルートから多量に酒を買い入れ自宅に貯蔵するが、貧しい労働者や農民はこのような密造酒に頼る以外に方法はない。不合理な法の下での不平等性が強調されている。またAl Caponeの有名な言葉が提示され、製造する側の主張が紹介される。

“Well, they wanted it. I only gave them what they wanted.”<sup>13</sup>

この言葉についての作者の解説によれば、密造業者は小説家や映画製作者、資本家、新聞発行者がそれぞれの作品や製品を提供するのと同様に、それを求める人々に酒を提供しただけなのである。

作者の密造業者についての意見はTom Halseyの場合で示されているように思われる。TomはVirginia州の山岳地方の出身であり、偉大な実業家を目指して酒の密造を始める。やがて金銭的な欲望に駆られ、零細な業者を吸収して大工場を建てる方法をとる。しかし違法であるために、取締り当局との摩擦や内部抗争が生じ、殺人事件に発展する。Tom自身は息子のGordonに誤って撃たれ死亡するのである。Tomは金銭的な欲望に捕らわれ、一団の首領の地位という権力を守るために殺人を部下に命じ、自らは息子に撃たれて崩壊していく哀れな人物として描かれている。

Virginia州の山岳地方の人々が収入源として密造の仕事をするには、違法な行為に対する罪悪感はなく、作者はこの点については同情的であるように思われる。しかしTom Halseyのような人物に対しては、その最後が暗示しているように否定的であるといえる。その意味ではここに明確な倫理観が示されているといえる。禁酒法は酒のない健全な社会を目指した法律であるが、その目的とは反対に悪や暴力が支配する社会を生み出した。Tomのような純朴な普通の南部人が普通の家庭を築くこともできず、金銭欲のために滅亡しなければならないのである。特に最後に息子に射殺される点に、作者の異常な社会に対する批判が感じられるのである。

作者の関心が禁酒法下の異常な社会の描写にあったことは明らかであるが、それ以外に最大の歴史的な事件の一つといえる南北戦争にも関心があり、特に作者が住む Virginia 州に関係する南軍側の歴史的な事実についての言及が見られる。作者はその関心を密造業者の一団に参加している人物である Alfred という若者の家族的な背景に含めているように思われる。Alfred は Virginia 州の開拓時代からの旧家の出身で、父方の祖父は南軍の騎兵隊の指揮官であった Mosby の隊で戦った勇士の一人である。また母方の祖父は南軍の Lee 将軍の下で戦った兵士である。このような Alfred の家族的な背景の説明に関連づけて、彼が Kit に語るという形式で南北戦争における祖父の活躍や様々な事件が語られる。その部分はいわば本筋から逸れた付随的なエピソードの部分であるが、その機会を利用して南北戦争を語りたいという作者の意図が感じられる。

このような家系の下に生まれた Alfred は冒険と刺激を求めて密造業者の一団に加わる。彼は祖父が南軍で働いたという誇りを持ち、祖父と同様に勇敢に戦いたいと希望している。彼にとって取締り当局との戦いは、祖父にとっての南北戦争と同じ意義を持ち、首領の Tom Halsey は Mosby と同じ地位にいる。しかし皮肉なことに彼の勇氣は Tom に悪用されて、内部抗争を解決するための殺し屋として利用され殺人を犯し当局に追われる身となる。禁酒法下の社会で南軍の勇敢な兵士のように取締り当局と戦うという考えは、単なるロマンチックな夢であることを示している。作者は彼のような純真な大学生でさえ殺人を犯してしまう異常な社会を批判的に描写している。

## 5

Anderson が描いた Kit 像は、*Perhaps Women* に見られた女性観を反映した新しい女性像であった。Kit が部分的に男性に匹敵する能力を備えた結果、女性としての特色が失われその女性像は男性化したものになった。この点では *Perhaps Women* での女性観をさらに押し進めたものになったといえる。しかしその結果として Kit は多くの男性の主人公と同じように孤独感、疎外感に悩むことになる。ここで主張されているのは苦況における人間に対する同情であり、人間同士の連帯である。即ち有意義な人間関係の必要性であるといえる。女性が十全な働きをするためには結局は男性の協力が必要で、女性は

単独では男性に替わることができないことを暗示している。さらに Kit が最後に Hanaford の元を去る点にも注意すべきである。彼女は彼とは精神的には共通点を見いだせるが、彼は戦争による怪我で結婚できない体であるからである。彼女は以前に若い農業の夫婦の生活ばかりでなく、妊娠している妻の姿にも強い印象を受けている。この場面で作者は母性を備えた女性を登場させ、Kit に将来のあるべき姿を示しているのである。即ち作者は *Perhaps Women* における考えを押し進め男性に替わりうる女性を描いたが、ここで再び母性を備えた、男性を救済できる女性を理想像としているのである。

Kit は貧しい家庭に育ち、より良い生活を求めて物欲にとらわれ、孤独感に悩むなどの点で、Dreiser の Carrie と類似点を持つ。Kit が Carrie と同じように特に初期において明確な個性がなく、環境に流されていく型の間人である点でも類似している。しかしその最後の到達点においては相違が見られるように思われる。Kit は最後の逃亡の途中で、貧乏ながら充実した農業の若夫婦の生活を垣間見て、物質主義の無意味さと精神的に充実した生活の重要さを認識するのである。Carrie は自分で積極的に運命を切り開くよりは運命にまかせる型であるのに対し、Kit はともかく彼女の信ずる方向に一步を踏み出そうと決意しているのである。Kit が最終的に目標に到達する過程は個性の確立の過程といえる。彼女は多くの人に助けられながら、個性を確立し自己の道を歩もうとしているのである。

この作品におけるもう一つの要素である禁酒法について考察すると、禁酒法の支配する社会とその下での人々の描写は緊張感とサスペンスを与え、この作品が Kit の成長過程をたどる単調な物語になるのを救っている。また禁酒法の社会の描写においてはその不平等性、無秩序な社会情勢、犯罪者が富を蓄える矛盾などが述べられ、その当時の社会の実態が明らかにされると共に作者の意見がその背後に感得され、読者に共感を与える。登場人物については、作者の住む Virginia 州の山岳地方と関連のある人物が多く描かれているが、いずれも同情的に描かれている。例えば Tom, Gordon, Alfred などはこの異常な社会の潮流に押し流され破れる人間であるが、作者はこれらの敗者たちを決して批判的に描写していないのである。その点に作者のこの地方と人々に対する深い愛着が感じられる。

Anderson はこの作品の執筆中に、彼の作品の出版者であり友人であった Maxwell Perkins に次の

ような手紙を書いている。

I do not know whether or not I wrote you very definitely about my ambitions as regards this novel, but probably I have. I have thought, Max, that one of the things that has betrayed me as a novelist is the inclination to, surrender too much to passing moods, a fact that has perhaps made my novels in the past too diffused. I want to avoid this in this novel, and I want you to help me.<sup>14</sup> (下線筆者)

文中の下線の this novel は *Kit Brandon* の意味である。この手紙は出版者に当てたものであり、多少の宣伝の意味での誇張が含まれるとしても、Anderson のこの作品に対する意気込みが感じとれる。彼は長編小説家として失敗してきた理由の一つは、その場の雰囲気流されて文章が散漫になる傾向があることだと自らを戒めている。その点からこの作品を見直すと、特に人物の背景を語る部分でエピソードが多くまとまりという点では問題があり改善されていないように思われる。また Kit, 話し手, 作者という三者の視点が明瞭ではなくこの点でも技巧的な問題が指摘できる。しかし我々は現代社会における女性の役割や、物質主義と孤独の問題、法の規制と人間の問題など、現代社会に通ずる問題を訴えてい

る点でこの作者の深い洞察と現代性を認めなければならない。

註

- 1 Sherwood Anderson, *Kit Brandon* (New York : Charles Scribner's Sons, 1936), p. 18.
- 2 Ibid., p. 95.
- 3 Ibid., p. 197.
- 4 Loc. cit.
- 5 Ibid., p. 358.
- 6 Ibid., p. 373.
- 7 Sherwood Anderson, *Dark Laughter* (New York : Liveright, 1970), p. 304.
- 8 Ibid., p. 316.
- 9 Sherwood Anderson, *Perhaps Women* (New York : Paul P. Appel, 1970), pp. 138-140.
- 10 Ibid., p. 140.
- 11 Ibid., p. 139.
- 12 Anderson, *Kit Brandon*, p. 116.
- 13 Ibid., p. 239.
- 14 Howard Mumford Jones, *Letters of Sherwood Anderson* (Boston : Little, Brown and Company, 1969), pp. 343-344.